



参考文献

矢野 暢『「南進」の系譜』中央公論社、1975 年、
 学習院大学史料館『旧制学習院歴史地理標本室移管資料目録』1998 年、
 岡田茂弘「高松宮下賜のアバイ模型について」学習院大学『史料館紀要』
 第 10 号、1999 年、など。

学習院大学史料館常設展

大正・昭和の教材
 —旧制学習院歴史地理標本室移管資料から—

会 期：2001 年 6 月～
 場 所：北 2 号館 1 階 史料館展示室
 編集発行：学習院大学史料館
 〒171-8588 東京都豊島区目白 1-5-1
 Tel 03-3986-0221 内線 (6569)
 発行年月：2001 年 (平成 13) 6 月

学習院大学史料館常設展

大正・昭和の教材

—旧制学習院歴史地理標本室移管資料から—



地球儀

2001 年 (平成 13) 度
 学習院大学史料館

大正時代
歴史地理
標本室



はじめに

今回の常設展示では、旧制学習院におかれていた歴史地理標本室で収蔵していた教材を紹介します。

教育というと、教科書に書かれる内容、教える教員の姿勢、これらを受け止める生徒のことが、まず語られるように思います。しかしながら、教育の現場ではじつに多くの教材が使われ続けてきました。

教材は、その時々教育内容・方法に沿った形で、つまり時代からの制約を大きくうけながら、作られ利用されてきました。

教材はまさに歴史資料であり、そこからある時代の特徴・傾向を、私たちは読みとることができます。

いまでも、多くの教材が作られ、学校で使われ、廃棄されています。今回の展示が、現在そして今後の教材の作成過程、利用、保存について考える契機となれば幸いです。

I 歴史地理標本室について

旧制学習院中・高等科の歴史地理標本室は、大正2年(1913)にすでに設置されていました(「標本原簿」大学図書館現蔵)。

昭和5年(1930)に、現在の西1号館ができてからは、その3階に置かれました。昭和24年の大学開設にともなって、西1号館が中・高等科から大学に引き渡されました。

収蔵品は、新制中・高等科と大学図書館に分散して保管されました。その後、昭和55年と平成元年(1989)の2度にわたり、当館に移管されました。

- 1 標本室の陳列棚(複製) 原本は院史資料室蔵
写真は大正4年(1915)に撮影されたもの。
- 2 標本室の陳列台(複製) 原本は院史資料室蔵
前掲1と同じく大正4年(1915)に撮影されたもの。
下賜品は別置されていた様子がわかる。
- 3 中等学科の歴史の授業風景(複製) 原本は院史資料室蔵
撮影は大正4年(1915)。教材として掛図が使われている。

II 収蔵品の移入経路

歴史地理標本室には、歴史関係約220点、地理関係約330点の収蔵品がありました。これらの移入経路については、「標本原簿」から、以下のように考えられます。

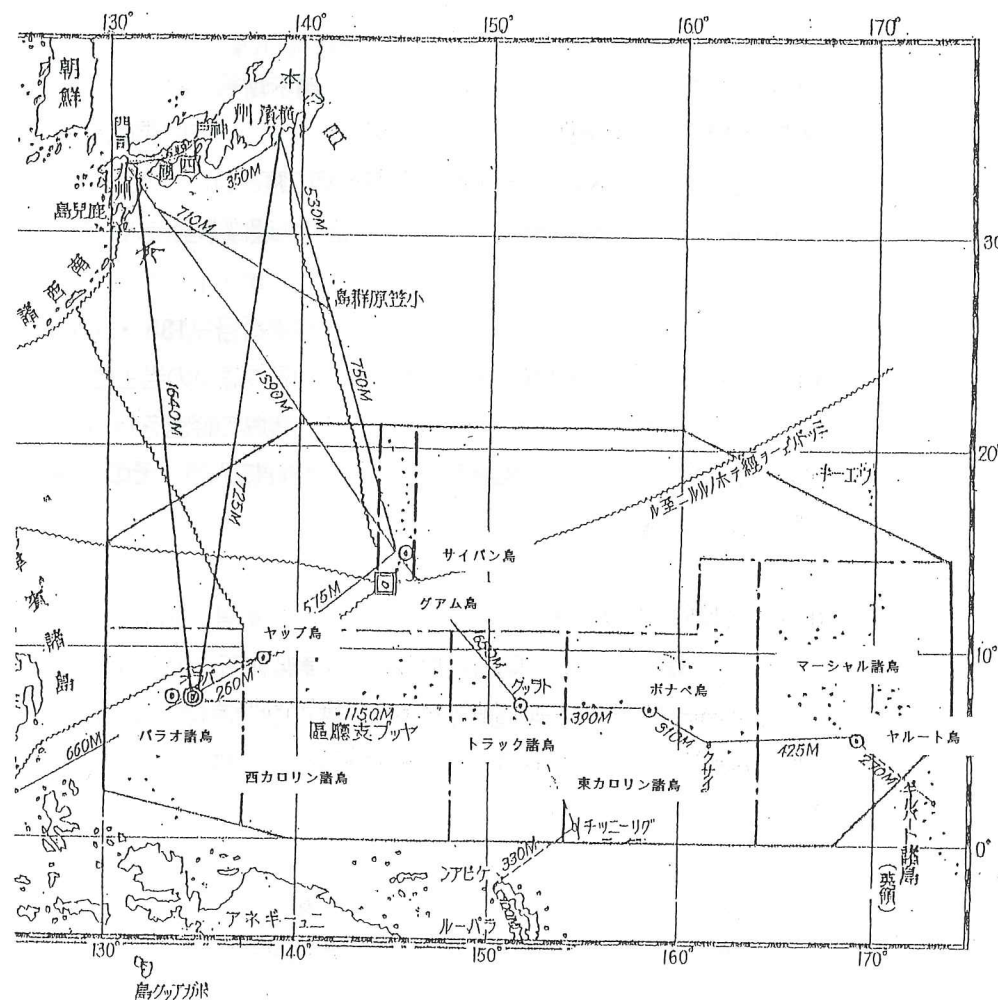
- (1) 宮内省管轄にあった帝室博物館(現東京国立博物館)・教育博物館(現科学博物館)などからの移管
 - (2) 学習院関係者(高松宮・尾張家当主徳川義親・南洋庁長官松田正之、高等科史学部など)からの寄贈
 - (3) 市販(島津製作所・南洋協会など)の教材セットの購入
- 上の3つの経路のうち、(1)(2)は学習院の特徴をあらわしています。(3)は、ほかの学校でも様々な教材を使っていたことを示しています。

- 4 不破関跡出土瓦片 請求番号 35
不破関は現岐阜県不破郡に所在。明治45年(1912)に尾張徳川家から、その私設博物館である明倫中学博物館に渡された。大正15年(1926)、同博物館の閉鎖にともない、歴史地理標本室に入った。
- 5 カンジキ 請求番号 135・136
大正15年に明倫中学博物館から寄贈された。尾張徳川の当主徳川義親(生没年1886~1976)は北海道八雲町で農場の経営を行っており、その関係でアイヌの風俗を示す品が博物館に入り、その後標本室に入ったと思われる。
- 6 陶磁器製造順序模型(木箱入) 請求番号 103
大正13年に購入された。製造は株式会社島津製作所。模型はほかに、地層構造模型・鉛筆製造順序標本・石炭製造順序標本など多数。なお、島津製作所の標本部は、第二次世界大戦後、株式会社京都科学として独立した。
- 7 鉄製小刀 請求番号 235
イエメン製。大正13年に内藤智秀氏より購入された。

- 8 木製円形楯 請求番号 254
アラビア製。大正13年に内藤智秀氏より購入された。

- 9 地球儀 請求番号 305
地人社製。縮尺1:190000000。昭和11年(1936)10月作成。当時、南洋群島が日本の委任統治下にあったことを表記している。

南洋群島地図



(松岡静雄『ミクロネシア民族誌』1943年、岩波書店
より転載、一部修正加筆)

III 高松宮からの寄贈

高松宮宣仁親王(生没年 1905~1987)は、大正天皇の第3皇子で、学習院中等科を3年で中退したあと、海軍兵学校予科に入学。大正14年(1925)に海軍少尉に任じられました。

高松宮は南洋方面の遠洋航海演習を行い、そのとき、南洋庁あるいはミクロネシアの有力者から品々を贈られました。帰国後、それらは標本室に収められました。

また、高松宮は「日本歴史科教用参考掛図」や日本各地の名所に題材をとった写真帳・絵葉書など、計49件(「標本原簿」)を標本室に贈っており、本資料群の特徴の一つとなっています。

- 10 アバイ模型 請求番号 294

本資料の添え書に「(パラオ諸島)北部総村長テンレイ」とある。昭和11年(1936)に標本室に収蔵された。アバイはパラオ諸島の男子集会所。パラオ共和国内でもアバイの遺存例は少なく、貴重な資料である。

- 11 マーシャル諸島カーヌー模型 請求番号 293

昭和11年に標本室に入った。マーシャル諸島は南洋群島の最も東端に位置する。

IV 購入標本 南洋特産物標本

第一次世界大戦中の大正3年(1914)、国際連盟の委託をうけて、日本は旧ドイツ領の南洋群島を統治することになりました。日本政府はコロール島に統治機関として南洋庁を置き、支庁をサイパン・パラオ・ヤップなど6ヶ所に設けました(南洋群島地図参照)。

翌大正4年1月、芳川顯正伯爵を会長に、渋沢栄一・田健治郎・近藤康平など政財界の有力者が発起人となって、南洋協会は設立されました。南洋協会は、日本製品の輸出振興、移民へのオランダ語・マレー語講習、研究雑誌の出版・講演の企画、教材の作成と頒布などを行いました。

昭和20年の敗戦によって、その活動基盤を失った南洋協会は解散しました。

12 南洋特産物標本注文票(複製) 請求番号 108

作成は東京麹町にあった南洋協会。昭和4年(1929)に18円で購入した際の半券。

資料中の難読地名のルビ: 新嘉坡 シンガポール 爪哇 ジャワ
比律賓 フィリピン 暹羅 シyam
緬甸 ビルマ
満蒙 まんもう(満州と蒙古)
西伯利亚 シベリア

13 南洋特産物標本・説明書 請求番号 108

南洋特産物標本の構成は、実物標本27種73点・説明書1冊・写真袋入り30枚からなる。説明書には、逐一、教育手引きが記されている。

14 コブラ製造実景(複製) 原版は請求番号 108

南洋特産物標本写真。コブラは椰子の実を切り割いて乾燥させたもので、油をとる。

15 南洋の米田(複製) 原版は請求番号 108

特産物ばかりでなく、教材には土地の風土・習慣などに関する教材も多く含まれていた。